

アメリカ南部のコロニアルな風景素描 —サウスカロライナ州チャールストンとその背域—

野 間 晴 雄

I. はじめに

アメリカ合衆国南部、サウスカロライナ州（South Carolina：州記号 SC）の歴史都市チャールストン（Charleston）は、人口140,476人（2020）の大西洋に面したコンパクトな中サイズの都市¹⁾である。自動車利用を前提にした郊外の発達が著しく、道路幅も広いアメリカ合衆国の都市のなかでは、この都市は旧市街が美しく活気がある。狭い道路にも路上駐車は少なく、その見学の核となる歴史地区は安心して歩いてまわることのできる港町である²⁾。

その起源は、1663年にチャールズ 2 世が植民地領主（Lords Proprietor）8 人にカロライナ領地を認めたことに端を発する。イングランド王チャールズ 2 世（1630-1685）の名に因み、チャールズタウン（Charlestown）として、1670年にアシュレー川右岸に初代の町が建設される。1680年に現在の場所に移動した。1783年に現在の市名であるチャールストンに改名された。

またこの都市は、南北戦争揺籃の地（cradle of the Civil War）としてもアメリカでは人口に膾炙している。旧市街地が立地するエスチュアリーの間合にはサムター要塞（Fort Sumter）³⁾ がある。ここに駐屯する北軍を南軍が攻撃したことで南北戦争が始まった。このような近代アメリカ史の豊かな記憶遺産をもつチャールストンは、全米各地から毎年400万人以上の観光客を集めている。ウォーターフロントの再開発が1990年代から卓越した市長の力によって始まる。現在では遊歩道や市民のための公園が整備されている。港には大型クルーズ船が横付けされ、下船して1日で旧市街やその周辺をめぐる観光客も多い。

現在では想像も出来ないが、1690年時点でのチャールストンは、北アメリカで第5の大都市であった⁴⁾。1840年国勢調査でも、アメリカ合衆国でなお第10位の人口を誇っていた。その重要性は当時の国際性の反映でもある。チャールストンはその背後に存在した大規模プランテーション農産品の輸出港であるとともに、その労働力として集められた多くの黒人奴隷の上陸地でもあった。大西洋を介して、イギリスの奴隷商人の本拠地であるリバプールをはじめヨーロッパ諸国とのつながりも強い。アフリカ系黒人のみならず、フランスのカルバン派のユグノー、ユダヤ人、アイルランド人、ドイツ人などもチャールストンに次々と流入・定住していったことに起因する。

一方、市の郊外の大西洋沿岸に目を移せば、湿地や亜熱帯性の常緑林の豊かな自然が広がる。海成の海岸平野は多様な汽水性の湿地環境を保持し、豊かな生物相がみられる。河川水は潮汐作用による海水の遡上による影響をうけ、着生植物がからみついた常緑のイトスギ(cypress)林が鬱蒼と繁茂し、水面にはワニ(alligator)やさまざまな淡水魚類が生息し、林内にはシカなどの野生動物も多い。

機上から海岸平野を見下ろすと、蛇行する流路の直角方向に短冊状耕地が、氾濫原をとところどころに点在する。この湿地を引っ掻いたような風景は、米のプランテーションの跡地である。現在の風景にも土地の履歴が強く投影されている。ただ、低平な海岸平野の島の一部は現在ではリゾートとして開発、連絡道路も整備され、退職者向けの高級住宅地となっている。

アパラチア山脈やピードモント台地に発して大西洋に流入する大小の河川は、下流の海岸平野にはいると氾濫と蛇行を繰り返す。そこを海岸からしばし遡ると、淡水性の湿地が川に沿って細長く連続する。この空間こそが、この地域で18世紀に全盛を迎えた米のプランテーションの適地であった。

サウスカロライナ州は、アメリカ南部、とりわけ低地地方(Lowcountry)の典型といえる独立13州のひとつで、深南部(Deep South)のゲイトウェーにあたる。南に隣接するジョージア州とならんで、亜熱帯産品によるプラン

テーション農業が発達した州であった。

本稿の課題は、このカロライナ植民地の首都、サウスカロライナ州のかつての海岸部⁵⁾の中心都市チャールストンとその背域の地域を統合的にとらえて、その都市発達史を、風景という視角から考察する地域素描である。関西大学東西学術研究所の「風景表象研究班」の研究例会で口頭発表した「アメリカ南部のコロニアルな風景—サウスカロライナ州チャールストン—」をもとに改題して成稿したものである⁶⁾。

この小稿の内容構成は以下の通りである。まず、次章でサウスカロライナ州の自然的基盤を大きく区分して植民史を概観し（Ⅱ章）、その中心都市であるチャールストンの都市プランや都市史、現況を筆者の現地での観察も含めて記述する（Ⅲ章）。次に、チャールストンの背域にあたる海岸平野のプランテーションの空間を、その主産品となった米の栽培技術の変化やプランテーション経営、それを担った大地主であるプランター（農園主）と労働力としての黒人奴隷、その中間にいる農園の監督者などの生活などを、各種の歴史的な記述から再構成する（Ⅳ章）。点としての都市の成立は必然的にその背域（後背地）と河川を軸に結びついてその領域を拡大していった。そのコロニアルな都市の風景と農村の風景を、最後に統合的に解釈を試みる。

18世紀にはアメリカ大西洋岸南部の有力な国際港湾都市は、南北戦争（1861-65）で南部の敗北、その後の奴隷制度の廃止により、労働力のほぼすべてを黒人奴隷に依存してたプランテーション経営体制が決定的な打撃を受けた。以後、背域のプランテーションは衰退し、その後新たな代替産品を海岸平野には見いだせず放置された。

そのコロニアルな風景の残滓は、わずかに農園主の風景庭園（landscape garden）にみられる。これは18世紀にイギリスで流行した自然を重視した庭園であるが、一般人のみならず政界・経済界の大物もこれらの邸宅を訪問している。古き時代の遺物が歴史の記憶の場となっている。

アメリカ合衆国をこれまで研究対象としてこなかった筆者にとっては、この

小稿はその素描の域をでるものではない。まずはその地域の多くの研究蓄積を読み込みつつ、問題点を浮かびあがらせることに意を用いた。

2020年はコロナ禍とともに、未曾有のアメリカ大統領選挙の混乱の年として記憶されよう。共和党トランプ前大統領の支持基盤である白人貧困層の強い南部地域は、もともとはプランターなどの大農園主や黒人層を支持基盤とする民主党の牙城であった。そこに、反移民、反黒人、反マイノリティ、反ユダヤ、反LGBT、反イスラム、反グローバリズムの「白人ナショナリズム」(渡辺2020)が席卷して大混乱をもたらした。その風土の遺伝子として、アメリカ南部の風土を、サウスカロライナ州の開発史とからめて考えてみたかったのも本稿執筆の動機である。

風景とは本来は自然を独立した対象物として知覚することが可能になったときに成立する観念である(イーファー・トゥアン 1994)。風景表象はこうした知覚経験やその記憶が何らかの意図や意味に基づいて文字テキストや造形イメージなどに置き換えられることで成立する。その記述体系を理解・整理し、活用する能力を風景リテラシーと定義すると、風景表象を読み解くこととは、そこに凝縮された意図や意味を通して、自然の知覚経験や記憶を考察することと言い換え可能である。本研究では、アメリカ南部、サウスカロライナ州の原初的な自然風景をまず想定し、そこに人間が入植し風景を変えていった時代をコロンIALな風景として考えていきたい。

Ⅱ. サウスカロライナ植民地の成立とその自然

1. 5つの地形区とその景観

サウスカロライナ州は面積82,931 km² (国内州のうち40位)、人口5,148,714人(2019年、国内19位)である。その規模は、北海道と面積(83,424 km²)、人口(2020年: 5,304,413人)ともほぼ等しい。人口密度はアメリカ東部の州としては思いの外低い。北はノースカロライナ州、南と西はサバンナ川の対岸

でジョージア州に接する。大西洋沿岸には海成の海岸平野が連続している（図1）。1729年にノースカロライナ州を分離している。

図1には州の境界を黒い実線でいれてあるが、隣接するノースカロライナ州、ジョージア州との明瞭な地形境界はなく連続的である。その空間は大きく、ブルーリッジ（Blue Ridge）山脈、ピードモント（Piedmont）台地、古砂丘地帯、海岸平野の4つに区分される。

ブルーリッジ山脈はアパラチア山脈の代表的な支脈で、ペンシルヴェニア州、ヴァージニア州からサウスカロライナ州の西端に連なる600～1200 mのなだらかな古期山地である。サウスカロライナ州には最高峰のミッチェル山（2,037 m）がある。大西洋に注ぐ多くの河川はノースカロライナ州のこの支脈に水源をもつ。

2つめのピードモント台地は、造山運動によってできた古い岩石が侵食された50～300 m程度のなだらかに起伏する丘陵である。粘土質の土壤は綿作適地となっているが、耕作による土壤侵食が激しい。

そこから急に標高を下げる領域が古砂丘（sand hill）で、マツやトルコナラ（turkey oak）の貧弱な植生がつづく。人口密度も低く、耕作不適地となっている。河川は早瀬や浅瀬が連続する。ここが滝線/瀑布線（fall line）で、6000年前までの海岸線にあたる。その連続線の上の台地上は比較的肥沃な農業地帯であるとともに、都市化・工業化が進んだ。州都コロンビア（Columbia）⁷⁾は、フィラデルフィア、ボルチモア、ワシントン、シャーロット（NC）などとならぶ滝線都市（fall line city）の代表である。

アメリカ東部はニューイングランドからジョージア州まで全長2600 km、幅300～600 kmのアパラチア山脈が、北東-南西方向に連なる。古生代の造山運動を受けたのち、長期間の侵食作用によってなだらかな山容を呈するその支脈がブルーリッジ山脈である。内陸部はアパラチア高原となっており、軟層が侵食された縦谷を形成し、硬岩は山地として残り山脈が平行するリッジアンドヴァレーの景観が展開する。サウスカロライナ州はこのブルーリッジ山脈がい

ちばん南西の奥地にある。その前面に中生代以降の堅い堆積岩・堆積層からなるピードモント（Piedmont）台地がひろがる。ここがサウスカロライナ州の綿作地帯となっている。州都のコロンビアもここに位置する。そのさらに内陸にはアパラチア山脈の主要な主脈のひとつであるブルーリッジ山脈の山麓が広がる。その前面には砂山地帯（sandy hill）といわれる軟層の傾斜地が存在する。その境が滝線である。ここが6000年前までの海岸線になる。

そのさらに前面に展開するのがほとんど平坦な海岸平野である。今回の考察する風景の舞台である。この大西洋・メキシコ湾岸の海岸平野はニューヨーク州ロングアイランド東部からメキシコ国境まで延びている長大なものである。フロリダ州では海岸平野といっしょになってさらに広がる。この海岸平野の



図1 サウスカロライナ州とその周辺
(Google Earth に筆者加筆)

空間こそがアメリカにおける初期プランテーションの場であった。バージニア植民地ではタバコのプランテーション、ノースカロライナ植民地では米、サウスカロライナ植民地では米、藍、ジョージア植民地では米が主作物であった（平出宣道 1963；Berlin 1998）。

海岸にいちばん近い地帯が海岸平野で、州の約3分の1の面積を占める。その形成時代によって、内陸海岸平野と外辺海岸平野に分かれる。前者は66～90 mほどの緩やかなうねりを伴い、後者は66 m（20フィート）以下の平坦な湿地である。

ここは3つのサブエリアに区分される。海岸の塩性湿地、河畔湿地、浜堤、沖洲、砂丘などの砂質の微高地である。なお、この地域は干満差が少ないため、干潟の形成は顕著でないため、農地の延伸は日本のような海面干拓ではなく、河川下流域の沿岸湿地に限られた。

一つめの塩性湿地はイネ科の沼沢地やアルカリ土壌にはえる塩生草が卓越し、イトスギの繁茂する沼沢地、ワニや蚊のいる湿地である。ここではエビ、カニ、牡蠣や魚類は豊富で、常緑のイトスギが繁茂している。

二つめの河畔湿地やその背後に広がる森林のなかで、ヴァージニアカシ（live oak）、ヒッコリー（hickory）などは船材や建築用材として有用である。初期の植民者はこの森林資源の略奪的な伐採と先住民との鹿革交易が大きな収入源となっていた。

その海岸平野と大西洋のあいだの沿岸地帯で、砂堆や沖州、潟湖、沿岸州（barrier/offshore bar/sand bank）、砂でできた島などが幅約10～30 kmにわたって海岸線に並行する。チャールストンの周辺には、サリヴァンズ島（Sullivan's Is.）、ジェームズ（James Is.）島、フォーリー島（Folly Is.）、ワッドマロー（Wadmalaw Is.）島、キワア（Kiawah Is.）島などが分布する。一部はビートリゾートや退職者むけの高級住宅もみられるが、そのほかは野生動物保護区や沿岸の湿地の森林地帯となっている。

この地域の特色は、比較的平滑な海岸線が多く、その内側が潟湖や小規模な

湾などを介して、湿地や沼沢地となっている（貝塚爽平ほか 1985：49）。多くの海成起源の低平な島がその前面に列状にならぶ。鈴木隆介はこのような三角州のタイプを湾入状三角州（embayed delta）と定義している（鈴木 1998：340-341）。水深が深く、干潟や滞りがほとんどないエスチュアリー的な性格が強い。これが初期の港として有利な条件となった。

これらを結んで、一部に人工の運河を開削して、ボストンからテキサス州まで沿岸内水路（Intracoastal Waterway：ICW）が1919年から米国議会の承認を受けて建設された。この内水路は3区間に分かれるが、いずれも米陸軍工兵隊が維持管理を行っている。軍事的な利用も含めた沿岸地帯の安全な船舶の航行のための物流の動脈となっている。

2. 初期の海岸平野の植民

この地域のサバンナ川流域にヤマシー（Yamasee）族、ノースカロライナ方面にはチェロキー（Cherokee）族などの先住民、いわゆるインディアンの諸部族が、漁撈やトウモロコシなどの栽培、シカなどの狩猟で自給的に暮らしていた。

サウスカロライナ州に記録の上で最初に入植したのはスペイン人である。1526年、キューバ島のハバナからスペインとの輸送船団の航海ルート上の停泊・軍事拠点として、サンタエレナ（Santa Elena）とならんで、ジョージタウンの町があるウィンヤー湾周辺が北アメリカ最初の入植地に定められた。フロリダ半島のセントオーガスティン（St. Augustine）に続く拠点である。また海岸平野には、フランスにおけるカルバン派のプロテスタントのユグノー（Huguenots）の国外逃亡者なども入植した。

サウスカロライナにおけるイギリス系プロテスタントの本格的な入植は1670年である。ウィリアム・セイル（William Sayle）に率いられた160名が、現在のチャールストンの対岸、アシュレー川右岸に上陸したことに始まる。1680年には対岸のオイスターポイント（Oyster Point）に小さな町チャールズタウン

を建設した。北アメリカにおける最初のイギリス人による計画的な町づくりがここで行われた。最初にここにやってきた人びとは北緯33度の大西洋上位置するバミューダ諸島（Bermuda Islands）⁸⁾からの白人であった。

もうひとつのルーツはカリブ海小アンティル諸島の最も東に位置するバルバドス（Barbados）島である。バルバドス冒険者たち（Barbadian Adventurers）は、ジョン・ヴァッサル（John Vassal）に率いられ、ポートロイヤル（Port Royal）とフィア岬（Cape Fear）に入植を試みる（Weir 1983：51）。いずれもそれぞれ沈降性海岸デルタの先端である。その開拓前線は当初はアシュレー川右岸側であった（Rosen 1992：14-15）。海岸から8 kmの地点、アシュレー川とクーパー川が分流するデルタの先端に現在の市街地はある。しかし、バルバドスのような砂糖諸島^{シュガーアイランド}の全面開発ではなく、販売・輸出用の商品作物の適性に応じて、あり余る広大な未開拓地のうちで、最も耕作条件や輸送条件が良い場所に、プランテーションを設置していったといえよう。

イギリスの西インド諸島植民地であるリーワード諸島（Leeward Islands）、セントキッツ（St. Kitts）、アンティグア（Antigua）、モンセラート（Montserrat）などの小アンティル諸島は、17世紀半ば以降に砂糖プランテーションに特化する。そのなかで全島がほぼサトウキビ専作の島が1627年にイギリスが領土としたバルバドス島である。当時の西インド諸島プランテーションの最先端であった⁹⁾。1640年代に砂糖生産に舵を切り、1660年代までにバルバドスはイングランドで消費される砂糖のほとんど生産し、ほかのイングランド領植民地すべてを合わせたよりも大きな貿易量と富を産み出した¹⁰⁾。その労働力としてのプランターたちはアフリカから黒人奴隷を輸入しつづけ、1660年代には、人口多数派が黒人で奴隷である最初のイギリス領植民地となった。白人2.6万人に対して奴隷が2.7万人であった（テイラー 2020：111）。この人口は、面積430 km²と、種子島（2020年の人口28,338人）とほぼ同じ大きさの島としては、過大なものであった。

バルバドスは隆起サンゴ礁の石灰岩土壌で肥沃であり、乏水性の環境であっ

たが、飲用の湧水が得られ生活するには安定した条件を有していた。島内で粗糖までを当時としてはかなり大規模な工場制手工業で行われた。そのため、そのサトウキビの搾り汁を煮詰める燃料としての森林がすぐに枯渇し、かつ人口も増えて、サトウキビプランテーションの全盛期に耕地不足、森林破壊、人口急増による耕地細分化が進んだ（Watts 1987：219-231）。絶対的な耕地不足のなかで、地主のなかには新たに北アメリカ南部に開かれたサウスカロライナに新天地を求める者がいた。

図2はアメリカ南部におけるおおまかな文化の流入経路を模式化したものである。南部の北の始まりであるペンシルヴェニアやチェサピーク湾を挟んだ地域から、アパラチア山脈の谷筋に沿って南下するルート、ヴァージニア植民地から大西洋岸に沿った2つの陸路が中心である。綿作地帯の拡大とその南進はこの陸路の後者と関わる。

大西洋からのルートとしては、ニューイングランドやフィラデルフィアから



図2 アメリカ南部へ文化の流入ルート

（Pillsbury 2006 編の事典中の Florin による図に筆者が SC を範囲を付記。

図中の記号は州略号）

ルートと、西インド諸島、カリブ海からの西インド諸島ルートがある。とりわけ後者がサウスカロライナ（SC）の文化形成に大きく作用した。つまり、海岸平野とピードモント台地は地形的にはつながっているが、外部文化の流入はむしろ丘陵地と海岸平野で別個に行なわれたといえよう。

18世紀後半のアメリカ独立戦争は第一次アメリカ独立革命（1775-83）といわれる。アメリカ国内には、その勝利の主体となった北部の工業資本家や大商人を中心とした社会と、南部の大プランターによるプランテーション農業を基盤とする相異なる社会が並存する矛盾を内包していた。とりわけ人口希薄な南部は、労働力として前近代的な黒人奴隷制度を廃止することができないまま、初期の主要輸出品であったタバコに代わって、陸島綿を中心とする綿花栽培が南部のピードモント台地を中心に広がり、綿繰機の開発・改良とも相まって、南西部、すなわちミシシッピ川河口のルイジアナ（LA）、ミシシッピ（MI）、アーカンソー（AR）などの沖積低地の諸州にまで広がっていった。これらは1800年以降に連邦に加入した地域である（柳生智子 2010：88-89）。

現在、アメリカ合衆国での米の州別生産量では、アーカンソー州（AR）、カリフォルニア州（CA）、ルイジアナ州（LA）、ミシシッピ州（MS）、ミズーリ州（MO）、テキサス州（TX）の順位で、この6州にほぼ限定されている（野間晴雄 2020：44）。しかしこの現在の分布パターンは19世紀後半になって確立したもので、それまでの米作の中心はサウスカロライナ州とその南に隣接するジョージア州（GA）の低地地方であった。いずれも黒人奴隷労働力による大規模かつ集約的なプランテーションでの経営で生産された。その米の最も重要な積出港で、かつ黒人奴隷の上陸・陸揚げ地がチャールストンであった。

3. 人口移動からみたサウスカロライナ

表1は大まかな数字であるが、17世紀末から18世紀の先住民（インディアン）、白人、黒人別の人口とその割合を示したものである。1700年まではなお先住民の比率が高かったが、その総人口も2万人も達していなかった。1730年

表1 17世紀末から18世紀におけるサウスカロライナの人種別人口

年	1685	1700	1715	1730	1745	1760	1775	1790
インディアン 比率 (%)	10,000 84	7,500 53	5,100 26	2,000 6	1,500 2	1,000 1	500 0	300 0
白人 比率 (%)	1,400 12	3,800 27	5,500 29	9,800 30	20,230 32	38,600 40	71,600 40	140,240 56
黒人 比率 (%)	500 4	2,800 20	8,600 45	21,600 64	40,600 65	57,900 59	107,300 60	108,860 43
計 比率 (%)	11,900 100	14,100 100	19,200 100	33,400 100	62,400 99	97,500 100	179,400 100	249,400 100

資料：Wood, Gregory, V. A. Waselkov and M. Thomas eds. *Hatley Powhatn's Mantle: Indians in the Colonial Southeast*.

以降は一貫して黒人人口比率がいちばん高く、1775年、すなわち独立前夜では、白人7.2万人、黒人10.7万人、割合にして4：6であった。その後、黒人の比率の伸びはやや緩慢になるが、サウスカロライナ州はアメリカ南部で最も黒人比率の高い州であったといえよう。手労働に依存した米や藍の大規模プランテーションを営む限り、安価で統制が容易な奴隷労働は不可欠なものであった。綿花プランテーションは、米や砂糖¹¹⁾、タバコなどのプランテーション作物と異なり、機械化が進むと生産量が飛躍的に増加するため、単位面積あたりの労働力は少なく、高い労働生産性が可能となった。西部開拓による領土拡張（フロンティアの拡大）、労働力としての黒人移民以外に、ドイツやアイルランドなどの中欧・西欧からの移民、中国・日本などのアジア系移民の受け入れによって多民族国家への歩を進めていった。

この時期から、綿花の輸出港はミシシッピ川河口のニューオリンズに移り、チャールストンの国際貿易港としての重要性は低下していく。それとともに、黒人奴隷も綿花に関連する使役労働のため南西部に移動して、チャールストン周辺の黒人比率も低下していく。それでも他地域に比べると高率を維持した。

1860年11月、奴隷制反対を掲げる共和党のリンカーンが大統領に当選する

と、翌12月にサウスカロライナ州を皮切りに、ミシシッピ、フロリダ、アラバマ、ジョージア、ルイジアナ、テキサスの7州が合衆国からの離脱を決定する。さらに1861年2月にミシシッピ州の民主党員のデイヴィスが南部連合の大統領に選出され、アメリカ連合国（Confederation State of America）を結成した。そして南北の対立が決定的となり、同年4月に南北戦争が勃発、4年の戦闘が続いた。リンカーン大統領が1863年に奴隷解放宣言をしたことに加え、港湾封鎖や工業力、海上封鎖によって北軍が有利になり、65年には南軍が降伏して4月に連合国は消滅、北部の勝利で合衆国の統一が維持された。この戦争は、鉄道、電信などが重要な役割を果たす近代戦であることから、「第二次アメリカ革命」ともいわれる。この戦争を契機に、以後、アメリカ資本主義は南部を包摂しながら、世界的な分業体制における原料供給地からその中心国へと大きく転換することになった。

そのため、アメリカ南部は相対的に経済的に遅れた農業地域として、内部で変質していった。分益小作制度や食料の自給体制が優勢になる。白人、とりわけアイルランドやスコットランド、ウェールズからの農業移民は深く綿作とかかわることになり、その原材料を北部の工業地域やイギリスに輸出する体制が続いた。その経済発展の流れにもサウスカロライナの低地地方は取り残され、チャールストンの栄華も過去のものとなっていった。

新大陸にやってきたアフリカの奴隷については、これまで中間航路（middle passage）やアフリカ、ヨーロッパ、新大陸の三角貿易として一般化されてきた。そのモデルとなったのはカリブ海地域や北東ブラジルなどである。北アメリカにやってきた黒人奴隷には大きく3つのルートがあることが近年の研究でわかってきた。つまり、アフリカから直接北アメリカの港に運ばれる奴隷のほかに、早期に砂糖プランテーションが確立したカリブ海域での奴隷の子孫などの再輸出が注目されている。また北アメリカ大陸国内で移動/売買もかなり数が行われてきた（ボーン Jr. 2020）。

表2は近年の「大西洋奴隷貿易データベース」の成果から、北米大陸への奴

表2 北アメリカ大陸の奴隷の時期別移出入の人数

地域 期間	北部諸州		チェサピーク		カロライナ, ジョージア		メキシコ湾 諸州		未特定		計	
	移入	移出	移入	移出	移入	移出	移入	移出	移入	移出	移入	移出
1676-1700	2,176	1,651	0	0	0	0	0	0	0	0	2,176	1,651
1701-1725	1,302	1,072	451	395	71	60	0	0	0	0	1,824	1,527
1726-1750	13,037	10,657	4,098	3,115	0	0	0	0	0	0	17,135	13,772
1751-1775	11,743	9,727	3,691	3,151	8,462	6,931	303	254	0	0	24,199	20,063
1776-1800	309	260	0	0	22,452	18,816	500	278	439	371	23,700	19,725
1801-1825	417	338	78	68	56,398	45,587	8,821	7,228	187	157	65,901	53,378
1851-1875	0	0	0	0	350	303	126	110	0	0	476	413
計	28,984	23,705	8,318	6,729	87,733	71,697	9,750	7,870	626	528	135,411	110,529

(「大西洋奴隷貿易データベース」より集計、作表)

表3 サウスカロライナへのアフリカ奴隷の時期別送り出し地と人数

地域 期間	米海岸	西・中央 アフリカ	黄金海岸	ピアフラ 湾曲部	ベニン 海岸	東南 アフリカ	不特定	計
1701-1725	1,048 16.1		195 3.0	17 1.8			5,149 79.1	6,509 3.8
1726-1750	3,075 10.2	11,887 39.4		3,366 11.1			11,862 39.3	30,190 17.6
1751-1775	36,444 50.4	11,359 15.7	8,542 11.8	6,808 9.4	2,207 3.1	293 0.4	6,640 9.2	72,293 42.1
1776-1800	3,145 29.5	1740 16.3	3,317 31.2	440 4.2			2,004 18.8	10,646 6.1
1801-1825	10,713 20.6	19,446 37.3	6,065 11.6		764 1.5	825 1.6	14,267 27.4	52,080 30.3
計	54,425	44,432	18,119	10,731	2,791	1,118	39,922	171,538
比率 (%)	31.7	25.9	10.6	6.3	1.6	0.7	23.2	

(「大西洋奴隷貿易データベース」より集計、作表。各行の下欄は地域別人数の比率を示す。)

隷の移出入を私が集計して示したものである。表1とは資料の性格が異なるので数値の連続性は指摘できないが、この表からわかることは、北部（ヴァージニア植民地など）やチェサピーク植民地ではその流入のピークが18世紀の半ばにあるのに対して、カロライナ、ジョージアでは18世紀後半から19世紀の最初の四半世紀に集中していることである。しかも両州からの移出数もかなりの数にのぼる。その多くは新興の綿作地帯やメキシコ湾岸への労働力として流れていったものと推定される。

また表3はサウスカロライナにもたらされた奴隷がアフリカのどの地域からの送り出しかを地域別に集計したものである。18世紀の1726-1750年の25年間にはコンゴなどを中心とした西・中央アフリカが多かったのに対して、18世紀の後半は西アフリカの米海岸（Rice Coast）といわれるシエラレオネ、ギニア、セネガンビアの海岸湿地帯での稲作技術に長けた黒人が好まれて移入されたことを物語っている（Fields-Black, L. Edda 2008；Littlefield 1981；Opala 1987）。カロライナでの米プランテーションとの関わりを推測させる。

Ⅲ. チャールストンの都市形成と住民の生活

チャールストン（Charleston）はサウスカロライナ州南東部、アシュレー川とクーパー川が合流する河口、標高約6mのデルタ上の微高地に位置する。州内では最古の港湾都市で、チャールストン郡庁の所在地でもある。ただし、サウスカロライナ州の州都はピードモンド台地との接点の滝線都市の一つであるコロンビア（Columbia）である。

図3は1733年のロンドンの地図制作者ハンス・モールによる初期チャールストンの古地図¹²⁾である。当初の町割は、デルタの半島部、クーパー（cooper）川右岸の突端になされた。まち全体を砲台を備えた城壁で囲んだ都市プランがよみとれる。南北の幹線道路としてのミーティング通り（Meeting St.）、東西の幹線としてのブロード通り（Broad St.）を基準に8区画が建設された。

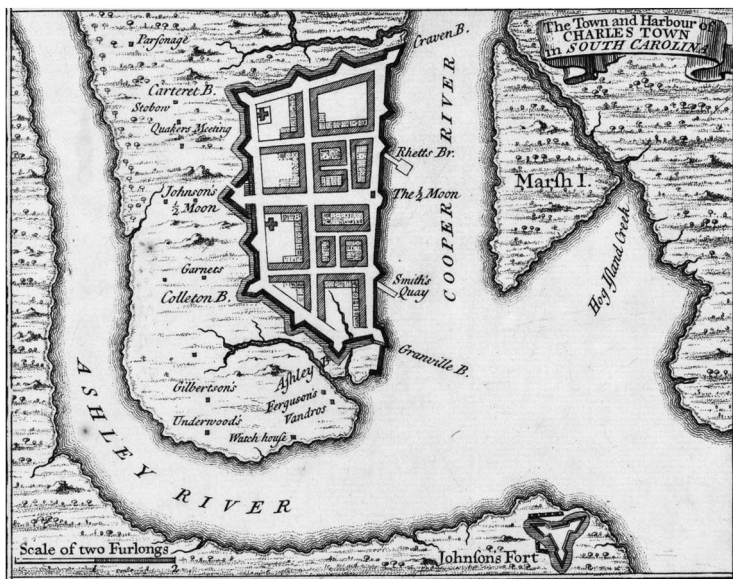


図3 初期チャールストンの都市プラン
(Library of Congress's Geography and Map Division)

チャールストンは聖なる市 (Holy City) としても知られる。低い視線の都市景観をなす有名な教会群があり、その多くの尖塔が街のスカイラインとなっている。東部13植民地の中では、ユグノーやユダヤ教徒、プロテスタントなど、信教に対する寛容さを認めていた数少ない都市のひとつで、さまざまな信仰背景を持った人びとがチャールストンに集まってきた。とりわけ、チャールストンは、ユダヤ人にその信仰 (ユダヤ教) を制限無く認めた最初のアメリカ植民都市でもあった。1749年に設立されたカハル・カドツシュ・ベス・エロヒムは大陸アメリカ合衆国で4番目に古いユダヤ教集会所である。プリス・ショロム・ベス・イスラエルはアメリカ合衆国南部で最古のユダヤ教正統派のシナゴグで、アシュケナジム (ドイツと中央ヨーロッパを起源とするユダヤ人) によって19世紀半ばに建設されたものである。このほか沖合のサムスター要塞

は南北戦争勃発の戦跡として著名である。

このほか市内には多くの歴史的建築が残存し、アメリカ南部におけるコロニアル観光の拠点となっている。

しかもこの町はアメリカ合衆国では歴史保全計画が見事に具体化した中小都市の代表としても知られる（服部圭郎 2007）。

「ウォーターフロント・パーク」整備は、現市長のジョセフ・ライリー（Joseph Riley）の強いリーダーシップの下、100年間放置されていた土地を、歴史的景観を保存しつつも住民に有益となるような施設とすることを目標に、1983年に観光促進事業の一環として開始されたものである。1800年代から20世紀初頭までは海運業の繁栄によってウォーターフロント地区は隆盛を極めていたが、造船業の衰退と共に駐車場以外の経済的活動は見られなくなった。

1970年代に民間により立ち上げられた民間開発計画は既存市街地との景観面で調和が図れないという理由から市民の反対により取りやめとなった。その後、市が用地を取得し、市民そして観光客が気軽に利用できる既存市街地と調和した魅力的な公園として整備された。

市街地の標高がほとんどが5m以下のため、たびたびハリケーンに見舞われて大きな被害をうけた。そのたびごとチャールストンは不死鳥のように蘇り、美しいヴィスタを創り出している。とりわけ、ウォーターフロントの公共空間が見事に整備され、旧市街地における徹底した高さ規制の導入によって、デザイン面でも全米の模範となるような施策を展開した都市として広く知られている。特に、保全に関しても、全米で最初の歴史建造物を保全するためのゾーニング条例を1931年に制定したことで著名である。

以下、1849年のチャールストン市街地図（次ページの図4）を参照しながら主要な建物・施設について述べる。

奴隷市場（Old Slave Mart, 図5）

市街での奴隷の売買はかつては市街地の公道で行なわれていた。1856年の市条例で禁止されると、Broad, Queen, East Bay, Meeting の4道路に囲まれ

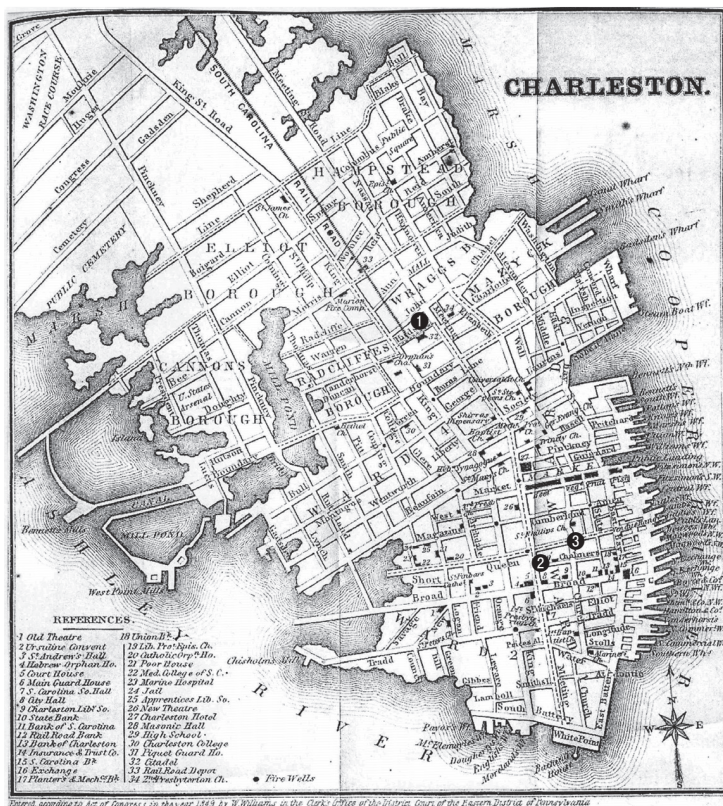


図4 1849年チャールストン市街図

(gr.printerst.com/pin/108368553276323861)

①鉄道駅(図14), ②市役所, ③奴隷博物館(図5)

た埠頭に近い地区で市場が設けられた。このあたりは居酒屋や売春宿もあった騒々しい地区で、その設立者は郡保安官のライアンとマーシュで、ライアン(Ryan)市場といわれていた。これを1859年に競売人のオークス(Z.B. Oakes)が買い取り、奴隷の競売場とした。その最後の競売記録は1863年11月である(Bostick 2014: 109)。奴隷市場の全盛は1860年代であった。ここを1930年に



図5 奴隷博物館
(2014年8月筆者撮影)

ウィルソン女史が購入して1938年から「奴隷市場博物館」として公開した。1987年に閉鎖されると、市とサウスカロライナ州アフリカ・アメリカ遺産委員会が買い取り、リニューアルして2007年から再公開している。

市街地の道路プランと住居の特色

南地のミーティング通り（図6参照）の両側は現在、中心ショッピングセンターとなっている。市役所、議会博物館、教会、プランターの居宅などの歴史的建造物が数多く分布し、市内のヘリテージ観光の中心となっている。

単一の家の狭い側が道路に面して入口となった切妻型の2階建て木造建築が市内に特徴的である。その一貫した特徴は家の長辺が通りに面していないことである。短辺の一階部分の形ばかりの玄関からピアツァ（piazza）とよばれる長辺側にあるベランダに入ると、実際の玄関とドアがある。そこから中に入ると、中央に広間（hall）と階段がある。広間の両側には1つずつ部屋がある。そのため、通りから見れば1部屋しかないようにみえる建物のためこのシングルハウス（single house）という名称がつけられている。2階以上の各フロア



図6 チャールストン旧市街のミーティング通り
(2014年8月筆者撮影)



図7 旧市街の縁辺におけるチャースルトン様式の住居
(2014年8月筆者撮影)

には2つの部屋があり、1階と同じ間取りが再現されている。家の背後の隣の家との境界にはものを運搬するための狭い通路がつけられている。湿気の多い亜熱帯気候を快適に過ごすために、南または西側に長辺にはいずれの階にもベランダがつけられている。筆者が滞在したキャノンバラ（Cannon Borough）でもこのようなタイプの戸建て木造建築が多くみられた（図8）。写真の左側の戸建てはその長辺にベランダのスペースがとれないため道路に面した短辺に玄関とベランダがある。

Ⅳ. チャールストン周辺の米プランテーション

農村風景はチャールストンのコスモポリタンな性格とは対照的だ。前庭を持った宮殿のようなプランターの大邸宅には、イギリスのカントリーハウス風の意匠がほどこされている。蛇行する海岸平野の河川に沿って点在するが、そこは暑さと湿気、蚊の多さのために常時は住まずに、より快適な場所である市街地にプランターは居住していた。プランテーション農園と結びついた集落は周辺にはほとんどなく、農村部人口の90～95%がアフリカからの黒人であった。

課業組織（task work system）では米栽培以外にも、空き時間に狩猟、手工芸などに取り組むことができたし、砂糖プランテーションに典型的にみられる組組織（gang system）での流れ作業的な単純労働よりは創意工夫が収穫量に反映され、その作業は送出地のアフリカの地域文化を彷彿とさせるものであった。彼らの音楽はギニア湾岸のものであり、食習慣もアメリカというよりもアフリカに近かった。

このチャールストンと周辺のプランテーションをコロニアル風景として統合的に把握するために、1）初期プランテーションの発展過程、2）プランテーション農園とチャールストンとの物流、人の移動の2つの視角から考えたい。

本稿で対象とするサウスカロライナは東部13州の中では大西洋岸南部に位置し、7～8月は月平均最高気が29度、月平均最低気温も18度を超え湿気も高く

暑い温帯気候（ケッペンの気候区ではCfa）である。冬は東京よりも寒く積雪もあるが、州の植物がパルメットヤシ¹³⁾であるように、海岸部は植物相も亜熱帯的である。しかも初期の植民者の多くはこの亜熱帯的な気候を利用した農産物や鹿皮、木材などの一次産品の輸出、移出が中心のプランテーションという形をとった農業植民であった。

カロライナ植民地はバルバドスで食い詰めたプランターであるコールトン卿がイギリス国王ジョージ2世に請願して、8名の申請者を領主とするきわめて大規模なプランテーション経営をめざしたものであった（下山晃英 1989：100）。最初の導入はマダガスカル（田中耕司 1989）からアジア稲（*Oryza sativa*）を1680年代に導入したことに始まる。この時期の米は畑での陸稲であった。

しかし18世紀になると多くのプランターが内陸での淡水灌漑稲作に向かった。この適地は蛇行する河川に並行する開拓の容易な沿岸低地であった。その沼沢地の一部を簡単な構造物で締め切り貯水地を創り出し、その水を、適宜、樋門の開閉を調節してイネ作付地に送り込む灌漑様式である。労働集約的なこの技術膨大な利益をプランターたちにもたらしたため、沼沢地は「カロライナの金鉱」といわれた（Edger 1998：140）。

しかし1760～70年代までにはこのような手間がかかる集約的稲作から、より大規模な土地生産性の高い潮汐灌漑米作にシフトしていった。感潮河川の沿岸湿地に堤防を建設して、干満差を利用して、満潮時に塩水楔^{くさび}によって河水の上部から淡水を取り込む様式である。毎日、満潮の時間が変化するため、厳密な時間管理による樋門調節が必要なことに加え、堰や堤防などのインフラ整備への投資が大きい。しかし、ほとんど勾配のない沿岸低地で、自然の力（潮汐）によって、灌漑水が逆流して広く灌漑可能であることが大きな特色である。佐賀平野に見られたアオ灌漑と同じ方式である。しかし多くのプランターはアメリカ独立戦争時にはこの方式をほとんど利用していなかった。

図8はチャールストンを中心に海岸平野の米プランテーションがどのような

アメリカ南部のコロニアルな風景素描
 —サウスカロライナ州チャールストンとその背域—（野間）



図8 チャールストン周辺の海岸平野の一次圏と二次圏
 (Edelson 2011 : 128による)

空間的配置をしているかをエデルソン (Edelson 2011 : 121-165) が要約したものである。河川水温を前提としており、50マイル圏が二次圏となっている。しかしより効率的な収穫物の集荷を考えると、クーパー川の流域となる一次圏に限定されてくる。後掲の図13のサンテ川 (Santee R.) では一部で陸路輸送を伴う。

その時期にコンバシー川 (Combathee R.) 沿岸で米栽培を試みたのがヘイワード兄弟であった。内陸沼沢地の淡水灌漑では1エーカーあたり600~1000ポンドの収量だったが、潮汐灌漑地では1200~1500ポンドと倍以上の収量が期待でき、さらに奴隷一人あたりにすると6倍もの収量となった (Edger 1998 :

266)。いわば機械化稲作の前段階で、潮汐力によって灌漑作業の省力化を図ったのである。奴隷が通常の水田管理に使役されるのではなく、土地基盤整備に駆り出されたのである。しかし、この潮汐灌漑は沿岸から30～35マイルまで影響はあるが、海岸の地形や河川の形状によってもその影響が強い地域と弱い地域ができる。チャールストンを中心としたアシュレー川、クーパー川（図9）は内陸沿岸湿地の米作としては先駆的である。チャールストンの背後の海岸平野にも多くのプランテーションが点在したが、この潮汐灌漑ではむしろ劣等地となり、多くの河川沿岸の内陸水田は放棄された。その景観が現在まで継続しているのである。

これに代わって台頭してきたのが100 km 北の海岸平野のジョージタウンを中心とした流域である。1850年にはサウスカロライナ州がアメリカ合衆国の米生産の74.6%を産出していたが、そのうち44.6%がこの地区であった（Edger 1998：269）。しかし19世紀の前半は世界の米市場が、ブラジル、ジャワ、ビルマなどの新興産地での生産増加、国内ではジョージア、ルイジアナ二州などの

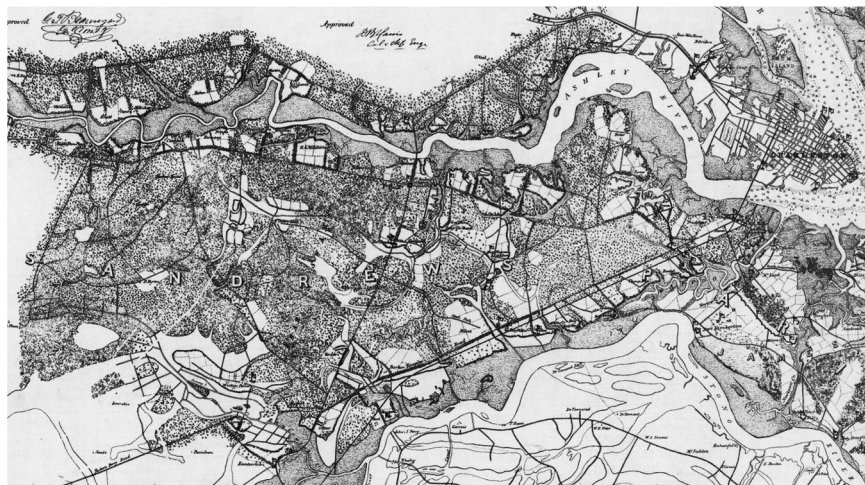


図9 旧地形図にみるクーパー川沿いの米プランテーション

アメリカ南部のコロニアルな風景素描
—サウスカロライナ州チャールストンとその背域—（野間）



図10 マグノリアプランテーションのプランター邸宅
(2014年 8 月筆者撮影)

台頭で、サウスカロライナ州の占有率は下がっていった。

図10はチャールストン北郊にあるマグノリア（Magnolia）プランテーションの観光用に保存・修築されたプランター邸宅である。

1676年に設立された州内では最古に属するプランテーションで、バルバドスのドゥレイントン家（Drayton）はチャールズタウンにコロニーを建設し、アシュレー川の沿岸に米のプランテーション農園を経営した。その庭園は、もともとは大きなものではなかったが、その子孫にあたるジョン・グレアム・ドレイトン牧師（John Grimke Drayton）がニューヨークの進学校で学んでいたときにフィラデルフィア出身の許嫁に出逢い、彼女が快適にプランテーションで暮らせるようにと庭園の整備・拡大に尽力した。ツバキ類（*Camellia japonica*）やツツジをアメリカで最初に栽植した庭園としても知られている。

イトスギが湿地の濃青色の水面に反射して、寄生植物のサルオガセモドキ（Spanish moss）が木々の枝から垂れ下がり、シダ類が繁茂する風景（図12）は、このプランテーションの象徴となっている。庭園のなかには木造の奴隷小屋



図11 復元された奴隷小屋
(2014年8月筆者撮影)



図12 マグノリアガーデン
(2014年8月筆者撮影)

アメリカ南部のコロニアルな風景素描
 —サウスカロライナ州チャールストンとその背域—（野間）

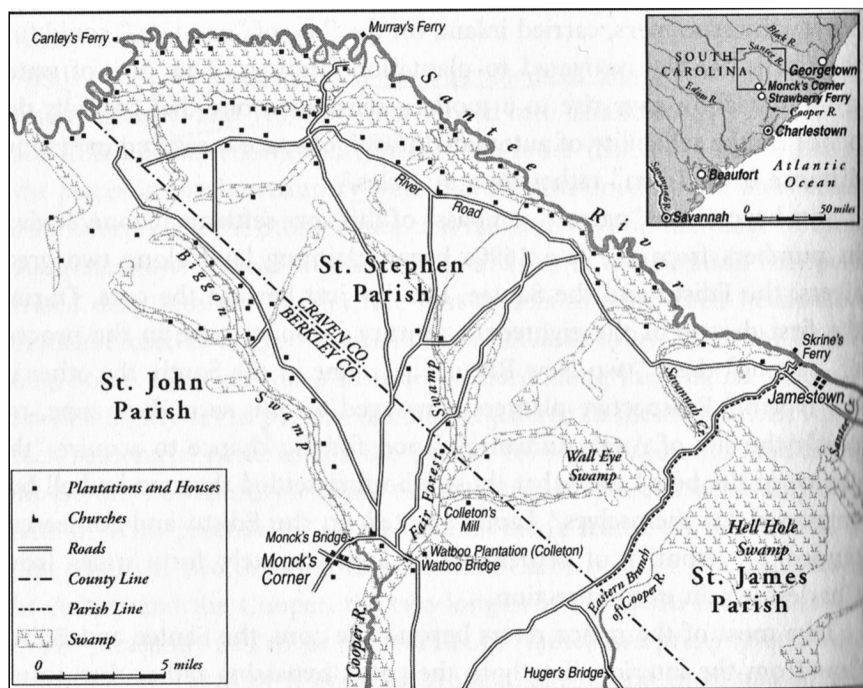


図13 背域の米プランテーション

(Edelson 2011 : 132による)

※米プランテーションのハウスと水田が河川ぞいにのみ分布し、
 凹地は沼沢地のまま残されている。

(図11) が復元されている。この庭園は18世紀イギリスでは幾何学的な庭園から非対称的な風景 (natural landscape) を重視する傾向と軌を一にするものであり、新世界での植物採集・探検がイギリスの博物学者によって推進され新たな植物種が導入されたこととも符合する。この科学的植物園がアメリカ啓蒙主義運動の重要なセンターとなったことはよく知られている。文化史的にはアメリカ国内でも著名なこの庭園はまさに上のような背景のもとでの拡張であった¹⁴⁾。

V. おわりに

アメリカ合衆国南部は、1783年のパリ条約で独立が承認された東部13州のうち、奴隷制度を容認したヴァージニア、ノースカロライナ、サウスカロライナ、ジョージアの4州に加えて、アラバマ（AL）、ルイジアナ（LA）、ミシシッピ（MS）、フロリダ（FL）、テキサス（TX）州を加えたアメリカ連合国の南部諸州をさすことが一般的である。

本稿ではこの合衆国南部のひとつの典型的なコロニアルな風景としてサウスカロライナ州の歴史都市チャールストンとその背域に展開したプランテーション、とりわけその中心となった米生産の発展過程を絡ませて詳述してきた。この都市と農村地域はそれぞれ独立した存在ではあるが、コロニアルな風景の解釈というコンテキストからは統合的に解釈されるべきである。その試論を最後に述べたい。

ここで私がとりあげた地域はアメリカ合衆国南部の低地地方という亜熱帯的な地域である。夏は湿潤高温で、イギリスなどヨーロッパからきた植民者にとっては耐えがたい湿気を含んでいる。一方、冬は降雪をみることもあり、月平均気温も東京よりも低い。そこに住む先住民のインディアンを別にすると、西インド諸島のイギリス植民地であるバルバドスからの砂糖プランテーションのプランターや奴隷、北アメリカ大西洋岸北部のニューイングランド（マサチューセッツ、ニューハンプシャー、ロードアイランドなど）出身でイギリスの宗教的弾圧から逃れたきた清教徒、ヴァージニアのタバコプランテーションに関わってきた人びとなどである。

これら初期の人びとがこの当時の最南部の新天地でまず試みたのは、どんな産物が商品として儲けがあるかということであった。そのため、まず身近にいたインディアンを介した鹿革交易、海岸平野に豊富にあった船材としてのイトスギ類の輸出であった。そのほか、農園に住む白人の監督者や黒人奴隷などは日常の食料としてトウモロコシや野菜などを栽培したが、高燥な畑地に適した

小麦は土地条件から適しておらず、現地の食料に適応せざるをえなかった。アフリカからの黒人には粘性のあるキャッサバ、サツマイモなどのいも類が好まれた。

白人プランターは、ふだんはチャールストン市街に居を構えて、貿易・金融にかかわる業務にかかわっていた。そこに米というこの地域を決定づける産物が導入される。しかしこの重量のある穀物を港から移出するためには河川舟運が必須となった。換言すれば、生産地として良好な場所でも、プランテーションとしては成立し得なかった。のちには鉄道がチャールストンを起点に内陸部や沿岸部を結ぶことによって、産地が拡大していった。途中で馬など利用した陸路を利用するとしても、最終的には船や鉄道を利用することになる。

内陸部で綿栽培が広がる19世紀以降は、この積出拠点としてもチャールストンが貢献する。しかし、ピードモント台地の綿作プランテーションの産地がしだいに西南部への移行するにしたがい、その労働者も移動していき、内陸部を縦断する鉄道や道路網の完成によって、海岸平野との結びつきは相対的に弱くなっていった。また白人の自営農民——その多くはアイルランド人やウェールズ、スコットランドなどで食い詰めた貧しい人びと、ドイツからの農民出身者——はピードモント台地で農業経営規模を拡大していった。

一方、サウスカロライナ海岸部の米生産も南北戦争以降はすっかり衰退する。ジョージアからさらにルイジアナ、アーカンソー、ミシシッピなどの分水嶺を越えて西南部へ米産地が広がるが、高コストで労働集約的な大西洋海岸平野の湿地稲作プランテーションは衰退する。

代わって、アメリカ南部、ルイジアナ、アーカンソー、テキサス州などのミシシッピ川中・下流域やメキシコ湾岸平野、プレーリーの南部で台頭してきたのが、大型機械を用いた白人の自作農による労働節約的な大規模稲作である。この「ホワイトライス」体系が現在の米の主要生産地を形成している。人口の少なさに対応した等質的なアメリカ化（矢ヶ崎隆典 2011：4-6）の一例でもある。奴隷の移入、米の積み出しで賑わったサウスカロライナのアシュレー川河



図14 旧鉄道駅跡のビクターセンター
(2014年8月筆者撮影)

口の国内有数の港湾都市チャールストンは地方都市になり下がってしまった。

現在、チャールストンはコロニアルな表象を残したコンパクトな都市として、多くの観光客を集めている。黒人奴隷の歴史、売買、生活などの表象（例えば奴隷市場やプランテーション）とプランターのイギリス本国のジェントルマン的な生活様式、マナー、社会慣習、港湾や鉄道、市場、公共建築物や文化施設などがよく保持されている。

そのチャールストンの歴史地区の保全活動はこれまでずっと市民が主体であった。その保全の歴史は20世紀初頭にまで遡る。もはやチャールストンがプランテーション農業やその富の集積では過去のものとなり、海軍の駐屯する港湾が町の経済を支えていた時期である。1902年の旧火薬弾薬庫を市民組織が買収したのがその始まりで、1913年には旧奴隷取引所の買収も進めている。1920年には歴史建築物保全のための最初の市民組織「歴史ある建物を保全する会」が設立され、現在の「チャールストン保全協会」の前身として継承されていく。これは全米でも最も古い市民による歴史保全関係の組織である。1931年には歴

史的重要建築物やその街並みを保全することを目的とした全米都市で最初の「歴史地区の保全条例」が制定されている（服部圭郎 2007；服部圭郎 2008）。

郊外化によって中心市街地が衰退するのは日本もアメリカ同じである。チャールストンはチャールストンプレイスという商業施設コンプレックスを建設し、ずっと放棄されていたかつての埠頭地区にウォーターフロントパークを創出し、市民の憩いの場所とした。さらに歴史地区の外に、旧鉄道駅敷地の細長い敷地を利用した観光客のためのビジターセンター（図14）を整備し、隣接して広大な駐車場をつくって狭い歴史地区への車の乗り入れを禁止、個々を拠点に馬車やバスによる市街地をめぐる拠点としている。卓越した市長の手腕によるところも大きいが、観光を核としたまちづくりの中小都市のアメリカでの成功例となっている。

〔付記〕

本稿は2013年度関西大学在外研究（海外学術研究）の成果の一部である。その後、日本学術振興会科学研究費「カリブ海域『砂糖植民地』の系譜と産業遺産の比較技術史」（挑戦的萌芽研究）課題番号：16K1280、2016～2019年度を使用して、周辺地域の補充調査を実施した。関係機関には謝意を表したい。

筆者のサウスカロライナ州の滞在は2014年8月1日～25日である。ただしその途中に、8月12日～18日はマイアミ経由で西インド諸島のバルバドスに滞在した。バルバドスからサトウキビプランターたちがカロライナ植民地にむかったのが1670年。ジョージアとカロライナ植民地はバルバドスの社会とよく似た性格をもっていたため、「帝国の役人はこの地域を「西インド諸島のカロライナ」と呼ぶのが普通だった。……しかし彼らは西インド諸島の商品作物と奴隷システムに代わる平等主義的な選択肢などという急進的な理想像はもちあわせることなく、カロライナに向かった。それどころか離島者たちは、大プランターの支配力と富を勝ち取るための、自分たち用の場所を求めているのだ」

（アラン・テイラー 2020：128-129）。

その場所の象徴がチャールストンであったという思いを今回の執筆で強くした。

注

- 1) チャールストンとノースチャールストンを含む都市圏人口は802,122人(2019)である。工業都市で空港のある北チャールストン市とは連担している。この都市圏人口は、州都のコロンビア都市圏について州内第2位の人口規模である。
- 2) ニューヨークに拠点をもつ旅行雑誌 Travel+Leisure で、2017年のアメリカでの最も人気のある都市の1位に選ばれている。
- 3) 海上の沿岸州にはニューイングランドから花崗岩を運んで作られた厚さ5フィート(1.5m)5面のレンガ構造物で、干潮線から15mの高さにある。
- 4) チャールストンよりも人口の多い北アメリカの大都市は、多い順に、フィラデルフィア、ニューヨーク、ボストン、ケベックである。
- 5) 現在のSC州の州都は、ミッドランズ(Midlands)と呼ばれる州中央部一帯の中心都市のコロンビア市である。州の地理重心に近い位置にあることから、1786年にチャールストンから移転した。合衆国史上初の計画都市のひとつである。
- 6) 2019年1月31日に関西大学東西学術研究所の研究例会で口頭発表した。
- 7) 1786年にサウスカロライナ州の新しい州都となるが、市制の施行は1854年である。現在の人口は13.2万人(2019)。標高約89mで、海岸平野とピードモンド台地の境界に位置する。綿花地域の中心はこのピードモンド台地で、この傾斜変換点での水車エネルギーが初期の紡績工場の動力として利用された。コンガレ川の通航限界点に、1800年にはサントー(Santee Canal)川とクーパー(Cooper)川を結ぶ35kmのサントー運河を建設、下流のチャールストンから運河を経由して物資が運ばれた。1850年頃には鉄道に取って代わるが、両都市の結びつきは今も強い。温暖な気候のため、現在、チャールストンは退職者が住む都市としての人気も高い(中野雅博 2013: 597)
- 8) ニューヨークの南東1080kmの大西洋上の1503年にスペイン人のジョン・バミューダによって発見されたサンゴ礁の低平な島。長く無人の地であったが、1609年にイギリス人のG. ソマーズらが入植し、1684年以後にイギリスの海外植民地になる。現在はイギリスの海外海外領土の中でも、政治的・経済的な自立度が高い。金融部門と観光産業が中心で、租税回避地(タックス・ヘイブン)としても知られている。アメリカの避寒地であるが、サトウキビ栽培には高緯度(北緯32度)で適さず、かつてはタバコ、柑橘類などの栽培しか販売商品がなく、本格的なプランテーションは発達しなかった。中心都市セント・ジョージはイギリスが北アメリカに進出した最も初期の都市型住居、軍事要塞を例証する史蹟として世界文化遺産となっている。

アメリカ南部のコロニアルな風景素描
—サウスカロライナ州チャールストンとその背域—（野間）

- 9) 最終的にイギリスは砂糖植民地を18世紀のジャマイカに求める。スペイン領のキューバの砂糖産地化はさらに遅れて19世紀である（野間晴雄「海を渡ったサトウキビプランテーション—ギアナからバルバドス、そしてトリンダード・トバコへ—」, 第60回歴史地理学会大会（愛知教育大学）, 2017年6月18日）。
- 10) ワッツ（Watts 1987 : 312）によると、1773年のバルバドスの人口は87,614人で、うち白人が18,532人、自由黒人534人、黒人奴隷65,584人、合計人口が87,614人である。白人／黒人比は3.7である。一方、表1により、サウスカロライナ州での1775年の総人口179,400人、うち白人が71,600人、黒人108,860人で、白人／黒人比は1.5に過ぎない。両地域の面積がサウスカロライナ州の方が193倍あるから、いかにバルバドスの砂糖植民地の人口過密が過大であったかが推測できる。
- 11) 17世紀末には西インド諸島イスパニョーラ島の西のサントマング（Saint-Domangu）では、フランスによってカリブ海域最大の砂糖生産地が形成された。1784年から1791年の時期にピークに達し、毎年平均で84回の奴隷船がこの植民地に到達したことを「大西洋奴隷貿易データベース」は明らかにしている（布留川正博 2015 : 1082）。18世紀末には4万人の白人に対してアフリカ人奴隷が50万人といわれるまで増大した。そこでの白人と黒人の混血であるムラートや自由黒人が奴隷制度廃止を求めて大反乱となった。1804年にはデサリーヌによって最初の新世界での黒人国家が誕生した（野間晴雄 2021）。その革命を逃れた自由黒人などによって、ルイジアナ州（1803年にフランスより購入）の海岸平野はアメリカ合衆国では最後の砂糖生産地、プランテーション地域となった。
- 12) <https://en.wikipedia.org/wiki/File:CharlestonSC1733.jpg>
Library of Congress's Geography & Map Division,
ID g3300m.gct00061
- 13) 熱帯アメリカ原産のヤシ科植物で、海岸平野に生育して、高さは20 m ほどになる。塩性に強い。
- 14) ここの内容は2014年8月に筆者がこの地を訪問したときに入手した資料・情報、展示解説による。ケイツビー（Mark Catesby : 1682-1749）はイギリス・エセックス生まれの博物学者で、『カロライナ、フロリダ、バハマ諸島の自然誌』（*Natural History of Carolina, Florida and the Bahama Islands*）で知られる。

文 献

- アラン・テイラー（橋川健竜訳）2020.『先住民 vs. 帝国 興亡のアメリカ史—北米大陸をめぐるグローバルヒストリー—』ミネルヴァ書房（原著は Taylor, Alan. 2013. *Colonial America: A Very Short Introduction*）.
- イーファー・トゥアン（阿部一訳）1994.『感覚の世界—美・自然・文化—』せりか書房（原著は1993）.

- 小林健二 1980. 19世紀末のアメリカ南部における農業不況の特質, 農業綜合研究, 34(2), 79-132.
- 下山晃英 1990. 英国商業革命期のアメリカ低南部米作プランテーション—砂糖・煙草・綿花との比較, 社會經濟史學 55(6), 797-824.
- ジョンエル・K. ボーン Jr. 2020. 最後の貿易船—残酷な貿易, ナショナルジオグラフィック 日本版, 2020年2月号, 56-61.
- 鈴木隆介 1998. 『建設技術者のための地形図読図入門 (第2巻 低地)』古今書院.
- 貝塚爽平, 太田陽子, 小崎尚, 小池一之, 野上道男, 町田洋, 米倉伸之編 1985. 『写真と図でみる地形学』東京大学出版会.
- 田中耕司 1989. マダガスカルのイネと稲作, 東南アジア研究 26(4), 367-393.
- 中野雅博 2013. チャールストン, 竹内啓一総編集『世界地名大事典7, 北アメリカ I』朝倉書店.
- 野間晴雄 2020. アメリカ南部における「ブラックライス」と「ホワイトライス」—海岸平野の大規模米栽培技術体系の形成と産地移動の含意, 人文地理学会 2020年大会発表要旨, 44-45.
- 野間晴雄 2021. イスパニョーラ島二つの国の経路—ドミニカ共和国とハイチ周回覚え書き一, 史泉 (関西大学史学地理学会) 第134号 (9月刊行予定), 1-23.
- 服部圭郎 2007. 『衰退を克服したアメリカの中小都市のまちづくり』学芸出版社.
- 服部圭郎 2008. アメリカ中小都市のまちづくり—中小都市にこそ未来の希望がある.
<http://web.kyoto-inet.or.jp/org/gakugei/judi/semina/s0803/index.htm#Mhat003> (2020年11月30日閲覧), 2008年度第3回都市環境デザインセミナー記録.
- 布留川正博 2015. 大西洋奴隷貿易の新データベースの歴史的意義, 同志社商学66(6), 1073-1090.
- 布留川正博 2019. 『奴隷船の世界』岩波書店.
- 平出宣道 1963. アメリカ南部の米作プランテーションの考察, 経済論集 (明治学院大学経済学会) 3, 35-65.
- 宮川淳 1982. 植民地時代のアメリカ米作—アメリカ米作の展開過程1, オイコノミカ (名古屋市立経済学会) 19(2), 1-14.
- 柳生智子 2010. 19世紀アメリカ南西部における綿花プランテーション経営について—遠隔地管理についての一考察, 三田学会雑誌, 103(4), 85-113.
- 柳生智子 2012. 北米植民地と大西洋奴隷貿易の展開: バージニア植民地とサウス・カロライナ植民地の比較分析, アメリカ経済史研究 (11), 21-42.
- 矢ヶ崎典隆編 2011. 『アメリカ (世界地誌シリーズ4)』朝倉書店.
- 渡辺 靖 2020. 『白人ナショナリズム—アメリカを揺るがす「文化的反動」』中央公論社.
- Berlin, Ira. 1998. *Many Thousands Gone: The First Two Centuries of Slavery in North*

アメリカ南部のコロニアルな風景素描
—サウスカロライナ州チャールストンとその背域—（野間）

- America*, Belknap Press: An Imprint of Harvard University Press.
- Opala, Joseph A. 1987. *The Gullah: Rice, Slavery, and the Sierra Leone American Connection*.
- Bostik, Douglas W. 2014. *The History of Slavery in the South Carolina Lowcountry from Inspections to Abolition*, Charleston Postcard Company.
- Doar, David, *Rice and Rice planting in the South Carolina Low Country*, Contribution from the Charleston Museum, 1936 (Second printing 1970).
- Edger, Walter 1998. *South Carolina: A History*, University of South Carolina.
- Edelson, S. Max. 2011. *Plantation Enterprise in Colonial South Carolina*, Harvard University Press.
- Edda L. Fields-Black, 2008. *Deep Roots: Rice Farmers in West Africa and the African Diaspora* (Blacks in the Diaspora), Indiana University Press.
- Edgar, W. 1998. *South Carolina: A History*, University of South Carolina Press.
- Kis, J. 2008. *A Moon Charleston & the South Carolina Lowcountry*, Avalon Travel.
- Johnson, Walter 1999. *Soul by Soul: Life Inside the Antebellum Slave Market*, Harvard University Press.
- Judith A. Carney 2002. *Black Rice: The African Origins of Rice Cultivation in the Americas*.
- Littlefield, D. C. 1981. *Rice and Slaves: Ethnicity and Slave Trade in Colonial South Carolina*. Louisiana University Press.
- Rosen, Robert N. 1992. *A Short History of Charleston*, University of South Carolina Press.
- Pillsbury, Richard ed. 2006. *Encyclopedia of Southern Culture*, Volume 2 Geography (電子版).
- Watts, David. 1987. *The West Indies, Patterns of Development, Culture and Environmental Change since 1492*, Cambridge University Press.
- Weir, Robert M. 1983. *Colonial South Carolina: A History*.